OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Clinical Outcomes After Durable Mitral Valve Repair for Ischemic Mitral Regurgitation |
| Author(s) | 千歳, 樹子 |
| Citation | 大阪大学, 2026, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/107029 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 論　文　内　容　の　要　旨

## Synopsis of Thesis

| 氏　　名<br>Name | 千歳 樹子 |
|---|---|
| 論文題名<br>Title | Clinical Outcomes After Durable Mitral Valve Repair for Ischemic Mitral Regurgitation<br>(虚血性僧帽弁閉鎖不全に対する形成術後の長期的な僧帽弁閉鎖不全制御例の長期予後) |

論文内容の要旨

〔目　的(Objective)〕

虚血性僧帽弁閉鎖不全症（ischemic mitral regurgitation: IMR）に対する外科治療として、縮小リングを用いた僧帽弁形成術（restrictive mitral annuloplasty: RMA）は広く施行されているが、術後再発および長期予後には課題が残されている。本研究の目的は、RMAにより僧帽弁閉鎖不全が長期的に制御されたIMR症例において、臨床転帰および左室機能の長期成績を評価し、その有効性と規定因子を明らかにすることである。

〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕

1999年から2015年にかけて、二次性僧帽弁閉鎖不全（mitral regurgitation: MR)を合併した虚血性心筋症（ischemic cardiomyopathy: ICM)患者166例に対し、冠動脈バイパス術と僧帽弁輪縮小術を施行した。追跡期間（平均65±34ヶ月）中に中等度以上の僧帽弁閉鎖不全の再発を認めた20名を除外し、長期的に逆流が制御された146名を対象として、術後の臨床転帰およびその関連因子を解析した。評価項目は全死亡および心不全再入院とし、心機能指標も併せて検討した。

期間中、計76人（52%）に死亡あるいは心不全再入院を認めた。年齢（ハザード比 1.05、$P<0.001$）と推定糸球体濾過率（ハザード比 0.61、$P<0.001$）が有害事象にそれぞれ関連した。有害事象発生群では、収縮期肺動脈圧、三尖弁逆流の重症度、下大静脈の拡張度、および血漿中の脳性ナトリウム利尿ペプチド（BNP）値が有意に高値であった。

〔総　括(Conclusion)〕

虚血性僧帽弁閉鎖不全症に対する僧帽弁輪縮小術により僧帽弁逆流が長期的に制御された場合でも、必ずしも良好な臨床転帰には結びつかないことが示された。特に、腎機能低下や肺高血圧に関連する容量負荷の存在が予後に影響する可能性が示唆された。これらの結果から、長期予後改善のためには、心原性ショックや腎機能障害が出現する前の段階で外科的介入を行うことが重要であると考えられる。

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）　千歳　樹子

| 論文審査担当者 | （職） | 氏　名 | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 大阪大学教授 | 宮川 繁 | 署名 |
| 副　査 | 大阪大学教授 | 武田 理先 | 署名 |
| 副　査 | 大阪大学教授 | 渡邊 美和恵 | 署名 |

## 論文審査の結果の要旨

虚血性心筋症では、心臓の血流不足により心臓の働きが低下し、僧帽弁閉鎖不全を合併することがある。本研究では、僧帽弁の手術により逆流が長期間抑えられた患者においても、その後の死亡や心不全による再入院がどの程度起こるのか、またその原因となる要因について検討された。1999年から2015年に手術を受けた患者を追跡した結果、約5年間で半数以上の患者に死亡または心不全再入院が発生した。特に高齢、腎機能低下、体液貯留による容量負荷を示す所見が予後不良と関連していた。本研究により、僧帽弁閉鎖不全を手術で改善できた場合でも、心臓全体の機能や全身状態を継続的に評価することの重要性が示された。この点が臨床的に有用な知見として評価し、課程博士（医学）の学位授与に値すると考える。